

社会の中で生きる力

社会福祉子ども学科 朝日 雅也

社会の中で生きる

人は基本的に一人では生きていけません。それは、社会的な存在の側面があるからです。社会的な存在である以上、社会の中で生きていくことが重要な意味を持ちますし、また、そのことが人間としての証でもあると言えます。

では、「社会の中で生きる」とはどのようなことを意味するのでしょうか。また、そのために必要な力とは何でしょうか。「社会の中で生きる」を考えていくためには、哲学的な観点から、あるいは経済的な観点から人間の社会的な存在意義を考えていくアプローチがありますが、ここでは筆者の教育研究の中心である社会福祉や障害者福祉の世界から迫ってみたいと思います。

社会の中で生きるために必要な社会的健康

皆さんもよくご存知かと思いますが、世界保健機関（WHO）の憲章は、その前文の中で「健康」について、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にもすべてが満たされた状態にあること」（日本 WHO 協会訳）と定義しています¹⁾。

健康の要素として、心身ともに満たされている状態は比較的理解しやすいところですが、「社会的な健康」とはどのような状態を指すのでしょうか。それは、同じ時代や地域等で生きる他の人々やそれらから構成される社会と「前向きで良好な関係」を築けることを意味していると考えられます。具体的には、「他者から必要とされること」、「社会の中で何らかの役割をもっていること」、「周囲の人々との関わり合いがあること」、「社会の中で自分の存在意義を示せること」などと表現できます。こうした社会的健康もまた、人々の健康の重要な要素だと言っているのです。

この社会的健康が心身の健康に影響を与えていることも知られています。国立長寿医療研究センターの研究によると、65歳以上の約14,000名を対象に約10年間の追跡データを解析した結果、「配偶者がいる」、「同居家族と支援のやり取りがある」、「友人との交流がある」、「地域のグループ活動に参加している」、「何らかの就労をしている」の5つの社会とのつながりがある人では認知症が発症するリスクが低下することがわかりました。これらの5つのつながりがある人は、ひとつもないか、ひとつだけの人と比べて認知症の発症リスクが46%も低いそうです。すなわち、特定のつながりを持つよりも、多様なつながりが認知症の発症リスクを低下させる可能性があることを示しています²⁾。

ところで、「前向きで良好な関係」と表現しましたが、それは個人の努力だけでは構築することが難しい場合が少なくありません。色々な理由で、自ら前向きで良好な関係を切り開いていけないことも人生の途上では生じがちです。では、そのような場合には、社会的な健

康の達成は困難となってしまうのでしょうか。

社会的な役割を担うこと

答えはもちろん「ノー」です。確かに「他者から必要とされること」、「社会の中で何らかの役割をもっていること」などは、社会的健康を実現、維持するために重要なことですが、それらを「個人の努力の結果」として狭く考えると、そこから漏れてしまう人は社会的健康の実現から遠ざけられてしまいます。

例えば、「リハビリテーション」と聞くと、機能回復を想起される方が多いと思います。疾病や怪我が原因で、心身の機能に障害が生じたとき、その機能を回復させることはもちろん重要です。ところが、今日的なリハビリテーションの考え方とも言える国際連合の「障害者世界行動計画」(1982年)では、「リハビリテーションとは、身体的、精神的かつまたは社会的に最も適した機能水準の達成を可能とすることによって、各個人が自らの人生を変革していくための手段を提供していくことをめざし、かつ、時間を限定したプロセスである。」(下線は筆者)と定義しています³⁾。「身体的、精神的かつ社会的に最も適した機能水準」に回復させていることは、これまで述べてきたとおりですが、「身体的、精神的または社会的に (後略)」の部分に着目すると、身体的、精神的には機能回復が限界であっても、社会的には最も機能水準を達成されることがリハビリテーションにおいて重要であると読み取ることができます。具体的には、いかなる重度の障害があっても一人の住民としての社会的役割を担うことができるようにする、全面的に介護を必要とする状態でも、コンピュータを使って仕事をする機会を得ることなど、社会的な役割を担うことの大切さはリハビリテーションの世界でも強調されています。

ところで、社会的役割というと、どうしても働くことが第一に想起されがちですが、人の一生を考えてみると、他者や社会との関係において実に様々な役割を担っていることに気づきます。それを明確に理論づけたのが、アメリカのキャリア発達学者のドナルド・E・スーパー(D. E. Super)です。スーパーは、職業や技能上の経験あるいは経歴など、とかく働くことや労働に焦点化しがちだったキャリアについて、「ライフキャリアの虹」という表現を用いて「人生のある年齢や場面の様々な役割の組み合わせである」と、人は多様な役割を持っていることを強調しました。例えば、労働者としての役割を果たす場合でもそれはライフステージの中の一部にすぎないことになり、家庭人として、余暇を楽しむ人として、あるいは一人の市民としての役割もまた、人生を送っていく上での重要な「キャリア」になるという考え方です⁴⁾。

必ずしも収入に結びつくような作業でなくても、例えば、高齢者の施設でサービスを利用している人が洗濯物を畳む作業を手伝うことで、重要な社会的役割を果たしている等の例は枚挙に暇がありません。

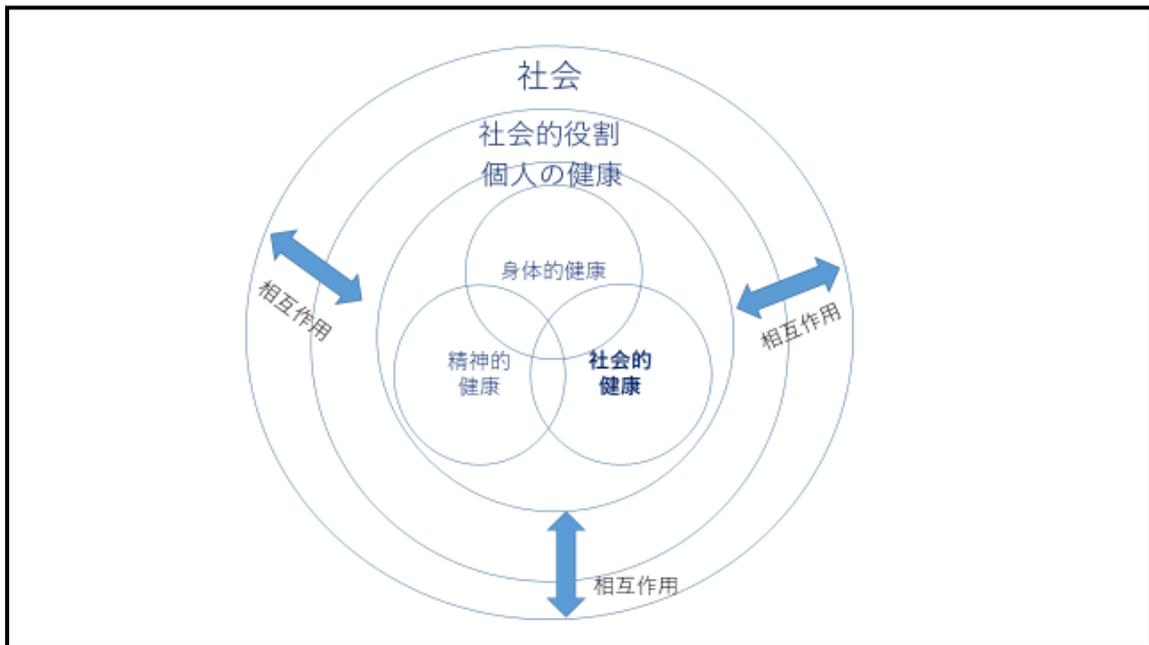


図 個人の健康・社会的役割・社会の関係（著者作成）

他者との関わりの中で生きていくこと

ここで重要なのは、誰もが社会的な役割を担えるようにすることは、本人の努力だけに依るものではなく、社会あるいはそれを構成する多様な人々との関係性の中で構築できる可能性があることです。

例えば、重度の障害があるために直接的な作業に関われなくても、その人の存在そのものが色々な人々に影響を与えていきます。これもまた、重要な社会的役割のひとつであり、同時にそれを認めることのできる社会であることが求められます。

他者との関わりというのは、いつも自身が自立して他者のために何かを為すことさしているわけではありません。例えば、障害があって、生活の多くの場面で介護を受けているとします。その際に、介護を受けている人はいつも介護の受け手としてのみ位置付けられるのでしょうか。実は、介護を提供し、それを受けるという相互作用を通じて、介護関係が成立しています。介護を受ける人がいなければ、介護を提供するという行為自体が存在しないことになります。他者との関わりとは相互性があるものであり、その承認こそが共に生きることの原点になるのです。

そして、社会的な役割を承認し合えることは、共に生きる社会を目指す上での原動力でもあります。以上の関係は図に示す通りです。

社会が生かす

社会で生きる力とは、社会的健康を基盤とした個々人の社会活動を行う上での能力（社会生活力）が重要な意味を持っています。しかしながら、それは単に社会的な役割の発揮が

自分で「できる」、「できない」の問題ではありません。必要な支援を受けながら、その社会的な役割を、自らの思いに沿って確実にしていくことが求められます。そのための社会的な諸条件を整えていくのは、社会の責任でもあり、むしろ社会側の力が試されているのです。

《参考文献・サイト》

- 1) 園田恭一：社会的健康論, 東信堂, 2010
- 2) 国立研究開発法人国立長寿医療センター. 社会との多様なつながり方がある人は認知症発症リスクが半減. 報道発表 No:127-17-20. 2017
https://www.jages.net/pressroom/?action=cabinet_action_main_download&block_id=1000&room_id=919&cabinet_id=95&file_id=3353&upload_id=3941.
(2019年5月20日閲覧)
- 3) 国際障害者年日本推進協議会：障害者に関する世界行動計画, 国際障害者年日本推進協議会, 1982
- 4) 文部科学省. 中学校・高等学校進路指導資料第1分冊（平成4年文部省）
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/06122006/001.html.
(2019年5月20日閲覧)